

＜「ハーフ」の捉え難さ＞を捉える

——日本社会における「ミックス・レイス」研究の確立を目指して——

大阪経済法科大学 アジア太平洋研究センター
客員研究員 下地 ローレンス吉孝

1 目的

米軍基地の駐留や、旧植民地からの人々、外国人労働者の増加などの歴史的背景によって、日本社会で「ハーフ」と呼ばれる人々の人口は増加している。しかし、80年代ごろから蓄積されてきた人の国際移動に関する研究群（移民研究、国際社会学、エスニシティの社会学など）では、事例の一部に「混血」や「ハーフ」が取り上げられるものの、「外国人」一般の研究枠組みに回収されてしまい、かれらを包括的にとらえる分析は十分に蓄積されてこなかった。

そこで本報告の目的は、①日本社会でこれまでなぜ「ハーフ」が主要な研究対象となつてこなかったのかを明らかにし、②包括的な「混血・ハーフ」研究として、日本型の「ミックス・レイス」研究のあり方を模索する。

2 方法

第一に、「ハーフ」「混血」をめぐる研究領域の現状と陥穽を捉える。より具体的には【1】人の国際移動研究における「ハーフ」の分析的な位置づけを整理しつつ、【2】細分化された現行の「ハーフ」研究群の問題点をまとめる。第二に、参与観察とインタビューの調査結果から、当事者が経験する人種化の影響を捉える。その上で、第三に、欧米で蓄積される「ミックス・レイス」研究を概観しつつ、日本社会での援用を目指す。

3 結果

人の国際移動研究では、研究の前提に「日本人」「外国人」を強力に区分する二分法が自明視されることで、「ハーフ」の存在が不可視化されるとともに、人種差別についてもしばしば無問題化されている。さらに、個別に蓄積される「ハーフ」研究群はこの二分法の構造を相対化できる視点を提供しきれてない。

4 結論

以上から、細分化された「ハーフ」研究群を統合しつつ、日本社会における二分法の人種構造を相対化しうる「ミックス・レイス」研究の構築の必要性を示す。